

九月のテーマ

されど挨拶



え・城谷俊也

自分から進んで 発信しよう

三

十代で倫理法人会に入会したHさんは、長年にわたり、会のお世話役として活動を続けていました。

入会当時は、経営者モーニングセミナー（以下MS）や倫理経営基礎講座で聞く講話内容に新鮮な感動を覚え、家庭内で実践したり、「活力朝礼」を取り入れたりと、積極的に取り組んでいました。

ところが、時間が経つにつれて、義務感のほうが強くなり、自らの実践として、新しいことにチャレンジしようという気概は薄らいでいくのでした。

新しい年度に移行し、新任の役職者の中に、Kさんという女性がいました。Kさんは誰よりも早く会場入りしてMSの準備にあたり、後から来るベテラン役職者に、「おはようございます！」と元気で明るく挨拶をする人でした。

いつものようにMSの準備をしていたHさんは、あることに気がつきました。Kさんに、資料のコピーや会場の椅子の追加をお願いすると、必ず「ハイッ、ありがとうございます」という返事が返ってくるのです。

依頼した側のHさんが感謝の気持ちを示すのが普通ですが、頼まれた側の彼女が「ありがとうございます」と言うのです。その姿を見て、Hさんは考えさせられました。

「自分は、父親が経営する会社の専務として、社業発展のため、新しいものを取り入れて一所懸命やってきたつもりだ。しかし、常識の世界に留まっていたのではなにか。このままでは時代に残り残されてしまう。この数年間、自分は何を勉強していたのだろう」

その日のMS後、Hさんは、入会当時の初心に戻り、自分から元気な挨拶をしながら出勤しました。そして、「おはようございます」の後に「いつもありがとうございます」と言うようにしたのです。

これまでは、人が何かをしてくれたらお礼を言うのが常識だと思っただけで、何をしてくれただけでもなく、「いつもありがとうございます」と言うようにしたのです。

続けていると、不思議なもので、日頃から「ありがとう」という言葉がスツと口をついて出るようになってきました。ひと月も経たないうちに、あるベテラン社員から「最近、専務は変わりましたね」という言葉をかけられたのです。

自分では「変わった」という自覚はなかったHさんでしたが、改めて思い返してみると、社員との心の距離が近くなり、「みんなのお陰で自分はこうして仕事ができるのだ」という感謝を持てるようになっていました。

さらに、社長である父親に対しても、自分から挨拶を交わし、報告、連絡、相談をしっかりと行なっていくと決意したのです。これまでは積極的に関わることを避けていましたが、求めているだけではなく、自分から発信していきこうと思えるようになったのです。